
41歳子持ち哲学者の憂鬱

沖田リオ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

41歳子持ち哲学者の憂鬱

【Nコード】

N4504Q

【作者名】

沖田リオ

【あらすじ】

へ人名と地名の価値の違いとはなにかへ人はなぜ人名を優先させてしまうのかこの哲学に決着がつくまで、頭の痛い日が続きそうだ……。

タカタカタカ・・・。
タカタカタカタカ・・・。
タカタカタカ・・・。

タイプライターの前で無駄な文字ばかり打ちまくる。
いや、無駄ではない。はじめの一行を書き始めるために必要な儀式だ。

と、周りに説明するが、返ってくるのは『紙のムダ』
一文字一文字インクで紙にプリントされるので、パソコンみたいにメモ帳に書いて一括デリートなんてできないのだ。
おかげで経理担当の奥さんから、紙の経費をお小遣いから差し引かれてしまっている。

今打っているのは、次の学会で発表する論文。
テーマは決まっている。〈人名と地名の価値の違い〉について、
だ。

頭では、まとまっている。

しかし、どうしても紙面に打ち出せない。

だからこうして、響きのいいキーを叩きながら、ムダな時間を浪費する。

地名と人名、どちらも固有名詞なのに、なぜ人間は“人名”を優先するのか。

地名は全て“呼び捨て”なのに、人名はまず名字に“さん”をつけることから始まるのは何故か。

同じ固有名詞ならば、初耳の地名にも“さん”をつけるべきではないだろうか。

そんなの、ありえない。

そう思っている人間の価値観を、書き出してみたい。

地名も人名も、なければ困るもの。だったら同等に扱うべきだろう。そう結論させるために、どうすればいいのか。

少し、整理してみようか。

人が人名を特別に扱う代表が、姓と名の使い分けだ。

人間は、初対面の人を呼ぶとき、名字に“さん”をつける。名前を呼び捨てになんて滅多にしない。

しばらく顔を合わせて仲良くなったら、名字を呼び捨てにしたり、名前に敬称をつけたりする。

そして最終的には、名前を呼び捨てにするか、あだ名で呼ぶ。

こういう風に、段階を踏んで二人称を変えていくのが人名だ。

逆の立場から考えても、初対面の人からいきなり呼び捨てにされたら、いい気はしないだろう。

また、家族と恋人以外は名前で呼ばないで、と決めている人さえいる。

では、地名はどうだろうか。

ごく一般的な人たちは、地名に敬称をつけて呼ぶことはまずないだろう。

それどころか、地名に敬称をつけて呼ぶなんておかしい、と思うのが常だろう。

そこが、オカシイのだ。

人名と地名。どちらも固有名詞とくくられている名詞なので、価値は一緒なのではないか。

それなのに何故、人は人名を優先させてしまうのか。

ここで、人名の“価値”について考えてみる。

価値観、それは人によって随分と考えが違ふものだ。だからここでは大衆的な例を挙げてみようと思う。

まず、“数量の価値”

物は、絶対数が少ないほど価値が上がり、絶対数が多いほど価値が下がる。

限定品のオークションで高値がつくのも、それが絶対数の少ないものだから。

逆に、みんな持っている物は価値が低い。簡単に言えば、珍しくないからだ。

そう考えると、“珍しい姓名には価値がある”といえる。

〈勅使川原〉とか、〈小鳥遊〉とか。一目見ただけで読み方が分からないような珍しい名字に、人はプレミア感を感じ、うらやむ。

反対に、〈佐藤〉や〈鈴木〉といったメジャーでどこでもみかける姓名に、人は魅力を感じない。

結論すると、魅力を感じ、プレミア感がある。

イコール、価値がある。

二つ目は、“史実的な価値”

数的には多くても、偉人と同じ姓名だから価値があるという考え方だ。

〈伊達〉であったり〈織田〉であったり、〈慶喜〉であったり〈政宗〉であったり、絶対数は多いが、思わず『あの偉人の子孫なの？』と聞いてみたくなる姓名のことだ。

過去にその偉人が残した業績が大きければ大きいほど、姓名も価値を増す。

三つ目は、“イントネーションの価値”だ。

一つ目にあげた数量の価値と似ているようで、似ていないグループである。

いくら漢字が珍しくても、読み方が普通ならば価値を感じない。読み方が特殊なものに価値を感じる、という考え方だ。

〈月見里〉のように、漢字の列が珍しくても、口頭で〈やまなし〉と告げられると、普通っぽくて魅力を感じない。

〈綺羅〉や、〈京極〉など、読み方が特殊なものに人は興味をそそられる。そんなところだ。

これらをまとめて、自分の姓名〈渡辺 晋作〉の価値をつけてみる。

渡辺は、絶対数が多いので価値が低い。

晋作は、数こそ多かれど、明治維新で活躍した〈高杉晋作〉を彷彿とさせるから価値がある。

では、地名の価値を考えてみよう。

地名は、基本被らない。娘の地理の教科書を見せてもらったが、被っている地名はわずかだった。

そこでまず、“数量の価値”が発生する。

地名を決定するのには、必ずルーツがある。著名人が決めたものであるとか、諸々の事情があって改称を繰り返したとか、例を挙げればキリがない。

ここで、“史実的な価値”が発生する。

地名には面白い読み方がある。〈桐生〉と書いてキリュウ。〈和泉〉と書いてイズミ。〈下呂〉と書いてゲロ。これも調べればたくさんでてくる。

“イントネーションの価値”が発生した。

このように、地名には人名と同等の、またはそれ以上の価値がある。

はずなのにどうして、人名を優先するのか

〈桐生〉と〈和泉〉、これが地名だと知っている人は『桐生。和泉』と敬称をつけずに発音するが、ひとたび人名だと言われれば、『桐生さん。和泉さん』と敬称をつけ始める。何故？

これをまとめるのが仕事なのだが、どうしても、まとめられない。いっそ初心に返って、このテーマについて語りたい理由から始めてみようか。

机の引き出しから、ネタが書かれたノートを取り出し、ぱらぱらとめくる。

『理由↓横浜をけなすバカなやつらを黙らせたい』

はて、ここからどうやって〈人名と地名の価値の違い〉というテーマになったのか。

いわゆる『哲学者脳』というものが働いて、こう変化したのか。

その『哲学者脳』も、今回の話題に関しては音を上げている。

頭、痛い。

無心にキーを叩きまくって、紙を一枚ムダに消費したところで立ち上がる。

いつまでもこうしていたって、アイデアが出ないことには変わらない。だったら、気分転換でもしてこようか。

たしか娘が帰ってきているはずだ。一緒に邦画でも観てだんらんしよう。

うちの娘は、最近の思春期には珍しいパパっ娘なのだ。最近彼氏ができたらしいが、デートに誘われても父親である自分との予定を優先してくれる。

正直、嬉しい。

（この論文を書き終えたら、今度は〈彼氏と父親の優劣〉について書いてみようか）

結論は『彼氏よりも父親を優先すべき』としてみようか。

空になったコーヒーカーップを手に取り、執務机を整頓してから、いつまで経ってもまとまらない考えに思考を走らせる。

今の自分の頭は、娘と会うことよりも、書きかけの哲学を優先している。

この哲学に決着が付くまで、憂鬱は続きそうだ。

(後書き)

ここまで読んでくださり、ありがとうございます。沖田リオです。
〈人名と地名の価値の違い〉この題について考えた人、少ないのではないのでしょうか？

本文中で未完となっているように、自分の頭の中でも決着がついていません。

こう、考えれば考えるほど泥沼にはまっていくようで……。

あと、一つだけお願いがあります。

この小説は、あくまで沖田リオ一個人の見解の基で作成されています。他の考えがあっても、当然だと思っております。

それについての誹謗、中傷はどうかお止めください。

では、またお目にかかることを祈って、この場を辞させていただきます。

2011年 1月27日

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4504q/>

41歳子持ち哲学者の憂鬱

2011年1月27日17時25分発行